
そばにいる

幸田もえ

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

そばにいる

【Zマーク】

N1034A

【作者名】

幸田もえ

【あらすじ】

舞子と美弥は違う。たとえ同じ人間だとしても・・・。

第一話・舞子

「おーい」

声をかけてきたのは「まー」と前田まー」と。同じバスケットボールクラブに所属している。

彼は学年トップのバスケの実力者なのだ。背も高く、顔も美形な為、かなり好印象である。

まことを追いかけてバスケクラブにはいった人も少なくない。

江藤舞子もその一人。今日も「まーくん、どこにいるかしつてるー」と追っている。

逃げ身のまことはちょっとびりプレイボーイで、いつもは明るい。

「みーちゃん、助けてーえ」

実は美弥もこのまことが好きだったりする。

だからまことと話すときは、上田遣い、にっこり笑顔を忘れない。

遅れたが、江藤舞子は雑誌「Like!」の読者モデル人気ナンバー1である。

通称「まいちゃん」。ワインクしたときの長いまつげと、長い足が羨ましい。

クールな顔もキュートな顔もこなす表情の豊かさが驚き。

全てにおいて一回り上の存在なんだ、と自覚さえもしている。

第一話・舞子（後書き）

大好きつておもう気持ちと、友達のほうが大事つて、どうち
が素晴らしい？

第一話・友達

「飯塚さん？」

軽く微笑んで美弥に声をかけた。その顔は、光の逆光で見えにくかつたが、舞子に違ひなかつた。

美弥は返事に困つた。初めてと書つてもおかしくない。舞子から声をかけられたのは。

返事をせずに表情だけで「なんですか」という顔をして見せた。舞子は困つたような顔をしていた。

「・・頼みがあるの。」

どうせまたまことどがじうのじうのだつて言いたいんであろう。美弥は飽き飽きして、とりあえず

「いいわ。何かしら」

と少し上の立場から返事を出した。舞子は可愛い顔をしているから、とてもことわる気にはならないのであつた。

「あたしと・・。友達になつてくれないかしら」

これには驚いた。何を言つのかと。でもこんな可愛い友達がいたら、嬉しい・・。

「 私には友達がないのよ。いつも誘うんだけど、『えー、あんたには男がいるんでしょう。』とか『ひがんでるつて思つてるん

でしょ』とか言われるんだ・・。でもそんなつもりないし

そのあと彼女は少し黙つた。やっぱり顔はかわいい。

「いいよ・・・友達って言つのはね、なつてつて言つやうのじゃなくて、自然となれていくんだよ。だからそんなの気にしなくて良いこと思つ。やっぱりこれはちょっと大人っぽすぎ・・・」

笑顔でそういうと、彼女の目からは涙がこぼれた。

こちらまでうれしくなりそうな素晴らしい笑顔。微笑ましい。

やっぱりなつてよかつた。美弥はおもつた。

部活の後、美弥と舞子は遊びに行くことにした。

舞子は可愛い格好が似合つ。そしてファッショソにも敏感だ。

今日のスタイルはピンクのキャミソールにジャンバーをはおり、半ズボンにカラフルなボーダーのハイソックスをルーズにしてはいていふ。

「可愛いね。」

まるで彼氏と彼女のやうなやりとりであつた。

そこで本当に彼氏でもできないかと美弥はおもつた。

と、その時。背後から低い男の声がした。聞き慣れた声だったが、背後ではわからない。

ふりかえると、そこにはまこととその友達の姿があつた。

「よ、2人でなにしてるの。もう4時だよ。帰りなつて、危ない」

心配性過ぎる。4時で帰れなんて、親よりひどい。

隣にいる男子・・・よく見れば一番格好良いと言われている『田比谷 純』のすがたがあるではないか。少々上田遣いの舞子をみると、2人の視線は舞子にあるように感じられた。

「ほんにちは、まーと、田比谷さん」

美弥は引き気味にいつた。純は吹き出ると、ぽんぽんと美弥の頭の上に手をおいた。

何か恥ずかしいことをしたのではないかと緊張した美弥。しかし次の瞬間、かなり驚いた。

「俺の」ことせ『じゅん』でいこよーん」

「あーだめ。だつたら俺の」ことせ『まーと』って呼んで

別にびりつかでもいこじやなことなぐれあてやりたくなつた。

でも二人とも可愛かつたから、希望通り、じゅんとまーとつて呼んで上げることにした。

第四話・裏口

制服を見るたびに、まじとの事をおもいだす美弥。はつと気がついたとわざら分は経つていて。

月曜日、あぐびをしながら登校。珍しく裏口から入ってみたくなつた。

ぽつんと立っている木を眺めながら、ぽつんとあるく美弥のすがた。誰も見ていないのを良いことに、美弥はゆっくり歩いた。

「あつれー？みーちゃんだー、だよなー、純。」

この頃の主はむちむちで、デキつとした。ところが、疑問をもつた。

どうして「こ」を通つてるの？こう、たかが、といつたらいいか、素朴な疑問を。

「あ、お、おはよーう。じゅんと、まーじゃなくてまーう。」「

まことにはじつと笑つと「よろしご」とあたまをぐつぐつとなじた。

「ねえ、じゅん・・・？じゅんはだれか好き・・・って思う人いないの？」

歩きながらふと質問した。純は、ふつと黙つて、急に笑顔をつくつた。

美弥の方を見ながら、どんどん口元が緩んでいく。

「みーちゃんに決まつてるじゅーん！」

恐ろしいばかりににやっと笑う。まじとも負けじと、

「俺も俺もー！おれもみーちゃんだもんねー」

この姿を舞子にみせたらどうなるだろつか。恋愛と友情、どちらを優先すべきか。

舞子もまじとも純も、大変な存在であり、優先するべきかせぬべきかは決めがたい。

「ねーねー、みーちゃん、びっちだよ」

美弥は口を揃えていつたまじと達のことを、本気にしてしまつといふだった。

今のところ、まじとのだけれど。。。

第五話・正夢

授業中も上の空。

「眠いよー先生、どーすればいいですかー」

彼女は桜井明美。このクラスの担任の先生である。とてもフレンドリーで、優しく面白い先生だ。

「えー、眠いのー。入って書[書]字を二回書いて飲み込むといわよー」

「何嘘ついてんのー、ばればれー」

つむぎやくはいつまじと。背が高くて、先生よりも大きいのだ。

「あいかわらず大迫力ねーーあっぱれよ前田君ー！」

脳天氣にもほどがあると美弥は思った。そんな先生は、結婚している。

そもそも、彼女は可愛くて、ほつそりしていて女らしい為、告白は少なくなかつた。

生徒にも相談したこともあつた。

「予鈴なつたーーおしまい、きりーつ、れーい、さよーならー。」

わざわざ用意して帰[か]つたことは席をたつた。

つてこいつと美弥もたつと、手紙がぽろりと落ちた。

「放課後、裏庭にきてください、話があります 前田まこと」「いつもかしまつたのはすきじやないはずだ、まことは……」「びびったんだわ。逆に心配になってしまった。

「ばーか、だまされんなよ、俺はそーゆーの嫌いなの。
俺は、やっぱりオマエが好きなかもしない。返事は又今度でいいよ。」

そう裏に書いてあった。ほとした美弥だったが……。

「えー!好きかもしれないって……。うそでしょー?」

たしかにまことのことは好きだけ、でも……。うれしさと不安でいっぱいだった。

はつ

目覚めると、そこは学校。もうすっかり夕日が降りている。

「夢かあ」

ガラガラガラガラ・。振り返るとまことの姿が。
驚いた様な表情をした。

「おきたの?」

「うん、寝てたの？」

そこから会話は続かなくて、2人でかえった。

第六話・急遽

次の土曜日は、女バスの試合だ。今は練習で精一杯。ホイッスルの音と共に、ドリブルの音が地に響く。

「飯塚つ、頼んだ」

バスはそんなに多くないが、「縁の下のシュー^T王」とかつていわっていた。

バスケは7歳からはじめ、今まで6年間、毎日ボールを触り続けている。

バスケ経験のない人からみれば、かなり不思議であるだろう。ラインクロスやファールも、ほぼ無い。プレイの仕方が遅いのかも知れない。

「違反女王」と言われる栄 松美、通称まつは、美弥に敵意があるらしい。

しかしそんなことをものともせず、一人黙々とプレイする舞子は、女子の憧れの的。

「もうすぐ女バス試合でしょ。頑張ってね」

男バスの選手達は次々と帰っていく。見物客かと怒りたくなったが、応援に支えられた。

「うん、応援有り難う。明日は男バスでしょ。絶対みにいくからね。」

舞子は上田遣いで男バスの先輩を見ている。それも格好いいひとばかり。

でもそんなふうな仕草できることが、美弥にとつてあこがれだった。舞子といい、純といい、じうして美弥の友達はこうこう美形ばかりなんだ、と美弥はつべづべ思つのであった。

「あれ? まいちゃん。今日まことになくないか?」

舞子はさがす仕草をして、ほんとだ、と田を合図させた。まことに電話してみると、驚きの一言が返ってきたのだ。

「俺バスケやめるから、みゅしくコーチに言つといで。みーちゃん、江藤、『めんね。俺も、続けていく気がないんだよね。』『オマエみたいになへなちょこ、やめちまえ』ってしかつてもしてくれないかな。。俺なんていなくても同じだよ、みーちゃん。」

「なんでそういうこというんだよ、ばか。オマエがいなかつたら女バスのみんなも、男バスのみんなも、どんづなに悲しむか、目に見えてるだろ? なんで急にやめるとか言つんだよ。だつたらあたしもまいちゃんも、純も、まつも、みんなやめるよ。きっとそれくらい簡単だよ。みんな大好きなんだよ、まーが。」

「なんかよく分からぬけど、きっとそうよ。あたしもまーくん追いかけたけど、美弥と友達になつて、いかにまーくん思いかわかつてきたのよ。どうして、そこで諦めたりするの。美弥の気持ちもわからぬに・・・見損なつたわ」

そこまでいふか、といふほど舞子も美弥もたつぱり愚痴をこぼした。多分電話の向こうでは、まことは涙をこぼしてこゐと思ひ。そして、今じばらく声をかけない方がいいと言つひとを学んだ。

「へー。そういうなら良こよ、といふとオマエしづきにこつたる。」

美弥は、大阪出身なので興奮すると大阪弁をしゃべるのだ。
そんな美弥の目にも、涙が浮かんでいることを、舞子は察知した。
そこで、舞子と電話を代わることにした。

「まーくん・・・馬鹿つ。バカバカバカバカつ。なんでオマエなんか好きになつたんだろう。今はすつゞーい不思議なんだけど・・・フフフ・・・馬鹿なのはあたしだよねー・・・。

まーくん、いや前田、どうしてオマエが好きだったのかが、解らねえな・。」

間をおいて、最後に凄まじく、鋭い言葉を残した。

「 も・よ・な・い 」

言ひ切ったときの舞子は、涙目だった。

やっこ市の2日後、やつとワケを聞き出せたのであった。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連＝横書きという考えが定着しようとっています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n1034a/>

そばにいる

2010年12月31日02時19分発行